

2015年10月・季刊51号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館 松居友



おもいきって、日本の若者たちを受け入れる決心をした。ことしの九月、今までになく、多くの若者たちがミンダナオ子ども図書館を訪れた。どんなに厳しい状況からきても、明るいMCLの子どもたちが、先進国？の若者たちに触れることによって、純粋さを失って行くのではないかと、最初は、すこし心配したけれども、そんな危惧は、あっというまに消えていった。むしろ逆に、経済的には恵まれていても心の貧困に苦しんでいるかのように見える日本の若者たちが、MCLの子どもたちと交わることによって日に日に明るくなっていき、心の重荷をおろしていき、こちらの子どもたちのような笑顔を復活させていくのを見ていると、現地の子たちの心の強さと豊かさが強く実感されてきて、賞賛の気持ちがいってくる。言葉の壁も宗教の壁もこえていることは、しっていたけれども、みごとに国境もこえている！なぜ、そんなことが可能なのかって？理由は簡単、愛に生き、友情をはぐくむ力がどんなときでも、どんなところでも生きているから！

日本の子どもたちを視野に

松居友

日本の子ども達、若者達を視野に入れて、日本とミンダナオで活動をはじめた。その甲斐もあってか今年の夏休みは、未だかつてない多くの若者達がMCLにやってきた。

ここに来ると、皆心から感動し、表情が明るくなり、いろいろと考えて、将来の夢や希望や目標が広がっていくのがよくわかる。

その様子を見てみると、思い切って門戸を開いて良かったと思う。それと同時に、MCLの子ども達にとっても、良い影響があるのが感じられた。

やはり子ども達、若者達こそが未来であって、彼らのために生きることこそ、未来を開くことだと思う。

それにしても、日本の現状は良くない。集団的自衛権が発足し、日本人の若者達が、海外で活動する危険性が飛躍的に増した。

MCLでも、来年の総選挙で和平合意が決裂し、戦争が起こる危険性を考えると、10月から訪問者の受け入れを止めざるをえないと感じている。

なぜ、日本人の大人達は、日本の未来を閉ざしていくのだろうか。

訪問者だった頃

宮木 梓

案の定、パンにアリが来ている。

小さな赤茶色のアリが、パンを入れてもらった袋の口に列を作ってこまごまと忙しなく働いている。

アリがいるのは、来るかもしれないと思っていたけれど特に対策を取らなかったからだ。このアリは悪くないアリなので、来てもそう問題じゃない。

湯沸かし器が壊れてしまっているので、鍋でお湯を沸かす。ダバオの空港近くの家にいる。

9月の朝5時半はまだ薄暗い。昨晩激しく降っていた雨は止んでいた。

日本へ帰国する訪問者の方を乗せて空港に向かって出発するのは7時。まだ、誰も起きてこない。

フィリピンでは、朝起きるとまずコーヒーの時間がある。お湯が沸いたので、鍋からカップにすくいインスタントコーヒーの粉を溶かす。

朝食用に、昨日パンを買っておいた。こちらの人にとってはご飯を食べないと食事にはならないらしいのだが、今朝は出発も早いし、日本の人はパンとコーヒーだけで十分だということで、これでいいことにする。

一人先にコーヒーを入れてしまったので、パンをつまむ。

パンの上で大喜びで働いているアリたちを、フーツと息を吹きかけて飛ばしてしまおう。パンの中まで入っているアリもいるけれど、特に気にも留めなかった。

しかし、あれ、と思いなおす。訪問者の大学生たちは、アリのついたパンを気にしないで食べるだろうか。

じきに長い夏休みがやって来る。早く飛行機のチケットを買ってしまわなければ、安いチケットは売り切れしてしまう。そのためにバイトをしてい

るとはいえ、飛行機のチケットは学生にとって高額だ。

思い始めるとじっとしていられず立ち上がって電車に乗る。梅雨の低い曇り空を見上げる。

電車を降り、駅ビルの窓のないエレベーターに乗り、旅行会社のカウンターに向かい、この人も以前は貧乏な旅行者だったのかもしれない、まだ若いような、もう若くないような、カウターのコンピュータの前に座っているスーツの馴染まない男の人に、南国に行くチケットを調べてもらう。買ってしまった。

後戻りできないように買ってしまっ



郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。



たのだ。もう行くしかない。

帰りの電車の中で、興奮の後から後悔がやって来る。出発の日が近づくにしたがって、憂うつな気持ちが強くなる。

飛行機を降りたら見知らぬ外国の飛行場にたった一人。

お金は限られているからタクシーは使えない。どのバスに乗ればいいのかろう、みんなが悪人に見えバックパッカーのシヨルダーを握りしめる。

それでも何とか受け入れ先にたどり着く。

受け入れ先の人があいつでもコーヒー

を飲むようと、部屋にコーヒーの粉と白い砂糖を置いてくれた。

慣れないベッドで目覚めた翌朝、さっそく白い砂糖に黒いアリの湧いている。アリが砂糖を好きなことを知っていたのに、ぎよつとした。早く水で洗わなければ、と思った。

もちろん白い砂糖も溶けてアリと一緒に流れていった。呆然とそれを眺めていたが、そこに気持ちの留まる余裕はなかった。

日中、畑仕事の手伝いで草を引いていればアリの巣を壊してしまい、小まい赤いアリたちに反撃される。小まい赤いアリが、私のお腹に噛みついたまま服の下で死んでいる。

今度はマンゴーの収穫だというので、子どもたちが木に登って落とすマンゴーを拾って籠に入れていくのだが、甘いマンゴーの実には大きな赤いアリがたくさんいて、腕からつたつて首筋を登ってくる。

南国の午後の空がどこまでも広く青い。

農作業が終わった夕方疲れ果てて部屋に戻れば、小さな黒いアリが服に盛大に卵を産んでいる。いったいどうしてこんなところまで来てしまったのだろう、と心の中でまたつぶやく。



飛び出せば一刻も早く帰りたくなるのに、とりあえず日本から飛び出していれば安心していられた。

子どもたちと竹でできた小屋に寝転がって緑のマンゴーをかじるのは楽しくて楽しくて、また戻ってきてしまうのだった。

そうして今も南の国にいる。パンにアリが来るのは日常だ。砂糖にアリが湧けば、そのままカップにコーヒーとミルクの粉と一緒に入れて熱湯を注ぐ。

浮かんた死体をスプーンで掬い出せばアリなしの砂糖で作ったコーヒーと

変わらない。

MCL. 8月から9月にかけては日本の学生たちの夏休みだ。

訪問者の方たちを、子どもたちは全力で歓迎する。到着した夜の歓迎会、そして帰る前日のお別れ会。

かつての「訪問者」だった私は迎える子どもたちと同じ側に座り、前の椅子に座っている訪問者の方たちを見つめる。

自分も何かをしたい、自分にも何かできるはずだと信じたくて、行かないではいられなかった。

行かなければ見ることでできない風景がそこにあると思った。

が、来てみて思い知ったのは自分には何もない、何もできない、助けてもらっているのは自分の方だということ。

日本の中で当たり前だったことは外に出てみると当たり前ではなく、それは私を楽にした。

日本に生まれて外国に行かれるような人生を与えられたのだ、がんばって勉強しなきゃなあ、と決心する。

夏休みが終わって、秋。大学に戻る私は、1か月前の私と同じように見えて、きつと違っていたい。

子どもたちは 絵本を取りだすと

松居 友

ミンダナオ子ども図書館は、緑の果樹園にかこまれたマノンゴル村のなかにある。そこからは、フィリピンの最高峰、2945mのアボ山がのぞめる。その山麓の高原にある学園都市キダバワン、その町外れにあるのがマノンゴル村。

小さな村の教会のまえを通り、小さな灌漑水路をわたり、でこぼこのわき道をはいつていくと、鉄格子の大きな



扉の前に立つ。その右側に看板がかけられていて、うしろには白い幹をした2本の大木が、なかよくくっついて生えている。

見あげると、おいしげった緑の葉ごしに、手のひらぐらいの大きさの赤い花たちが、まるで炎のようにたくさんあつまって、まっさおに広がる熱帯の空にむかって咲きほこっている。ミンダナオでは、ファイアーツリーと呼ばれている、ゆうめいな火炎樹だ。

正面の門の扉をあけてなかにはいると、りょうがわにはヤシの木と花壇がつづき、女の子たちが楽しくおしゃべりしながら、花壇の手いれをしている。

左側にはコンクリートでつくったお米の干場がひろがり、こちらでは男の子たちが、水田でとれたモミ米を手作業でひろげて干している。年上の子たちにまじって、小さな子たちも素足でモミ米をいっしょになつて広げている。雨がふるとコンクリートはつるつるすべる。そういうときには、子どもたちは大喜びで雨のなかにとびだしていき、すっ裸になつてすべつて遊んでおおはしゃぎ。

敷地内にはいると、その先に、青いトタン屋根の母屋がみえてくる。大きなワシが、羽を広げて飛び立とうとしているかのような、横長の建物。これ

が、最初にできた第一棟。そしてコンクリートのお米干し場のむこうがわにも、二階だてで少し小さめの長屋が見える。日本の古い農家のような草葺き屋根。こちらでは、ニツパヤシと呼ばれる水辺に生えるヤシの葉っぱで葺いてある第二棟。二階の木造で手すりのついたポーチからは、子どもたちがこちらに向かって手をふっている。

さらによく見ると、マンゴーやドリアンの木の向こう、敷地のずつと奥に、やはり草葺きのかかなり長い長屋のぞめる。その下は、食堂になっていて、最近できた第三棟。そちらのほうでも、たくさんの子どもたちが遊んでいるの

が見える。

建物は、土台となる一階がコンクリートで、まわりの草はらにとけこむように緑にぬつてあり、二階は木でできていく。なるべく壁をつくらない、ボルネオの伝統的な集合住宅にヒントをえてデザインをした二階建ての長屋。ぼくと妻のエープリルンが訪問者といっしょに帰ってきて、母屋にちかづいていくと、二階の木のポーチから見下ろしていた子どもたちがおおこえでさけぶ。

「わーい、かえってきたー！」

「かえってきたよー！」

「パパ友が、かえってきたー！」

「ママエープリルンが、かえってきたー！」

「たー！」

するとあたりいったいどわーいという歓声がおこり、ポーチの子たちは二階からかけおりてくるし、庭で遊んでいた子たちも大喜びでかけよってくる。どこにこんなにたくさんの子どもたちが！と思うほど、おおぜいの子どもたち。

「おかえりー！」

「おかえりー！」

「おかえりなきーいー！」

そうさけぶと子どもたちは、すごいきおいで抱きついてくる。ぼくと妻のエープリルンは、そうした子たち



を心からぎゅっと抱きしめる。

いっしょに到着した日本からの訪問者や若者たちは、そんな子どもたちの様子をみてびびり。

「この子どもたちは、奨学生なんですね。」
「ええ。でも、うちの奨学制度はかわっていてね、成績の優秀な子を採用するのではなく、極貧で三食たべられないような村のなかでも、とりわけ境遇が厳しい子ども、とくに孤児や崩壊家庭の子を優先して、小学校から大学までいかせてあげているんです。」

「へえ、それじゃあ、この子どもは孤児や片親、問題家庭からきた子どもたち？」

「なかにはそうじゃない子もいるけれど、両親が健全な子どもたちの場合は、極貧でも、なるべく親元から学校に行かせるようにしています。外部の奨学生をいれると600人ぐらいの子どもたちにスカラシップを提供しています。」

「えっ、そんなに!」

「ええ、活動地域が広大なので、放っておくことのできない子が多くて。イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族がなるべく均等になるようにしているけれど、先住民族が多い。貧困の度合いが強いですね。次が戦争の耐えない地域のイスラム教徒の子たち。」



そのなかでも、虐待されていたり、孤児だったり、現地に置いておけない子どもたちは、本人の意志でここに住めません。ただし、どうしても帰りたくなれば帰れるし。あくまで本人の意思と保護者の了解が基本です。そのせいか、孤児施設のように、扉に鍵はかかってません。脱走しようとする子はいませんからね。」

「それにしても、まあ笑顔いっぱい、ほんとに明るい子たちですね。」
子どもたちは、訪問者にも大歓迎であいさつして、荷物があればそっせんでかっついて、訪問者の泊まる二階の部屋に案内してくれる。

二階の木造のポーチにのぼり、手すりごしに敷地内を見わたすと、マンガーやマンゴステイン、ドリアンといった熱帯果樹がはえていて、ひろい草はらで楽しそうに遊びまわっている子たちや、畑で野菜の手入れをしている子たちもいる。

「いまは、約80人。」
「えっ、そんなに! 食べさせるだけでも大変でしょ!」
「ええ、ここ以外にも、山には男子寮と女子寮のふたつの下宿小屋があって、さらに大学生の町の下宿施設もあるし、その子どもにも米を支給しているから、ぜんぶで200人ぐらいの子どもたちを食べさせてあげているんです。そんなわけで、一日100キロの米が消費されます。」
「なんですって、一日だけで! 米代が大変でしょう。」
「ええ、もし買っていたら今頃は破産でしょう。でも、水田を手にいれてなんとか自給しています。2・5期作だからやっていける。ほら、あそここのコンクリートの干場、あそこで子どもたち自身がお米干しをしているんです。そして、向こうの野菜畑、少しでもおかずを自給して、学用品を買い

「ぜんぶで、何人住んでいるんですか?」

「子どもたちは、この部屋に寝ているんですね。部屋の壁も、ベッドも竹をあんた伝統的なつくりで、あたたかい感じだなあ。」
「ええ。広いポーチが生活の空間で、部屋は寝るだけ。」
「個室ではないんですね。」
「ハハハ、こちらの子どもたちは、個室ではさびしくて寝られない! こちらの山の生活も、竹の床で家族がみんなで川の字になって寝ている。」
ここに住んでいる子たちは、ほとんどが孤児や崩壊家庭からきた孤獨な子たちだからこそ、個別に孤立したコンクリートの個室をあえて作らず、故郷を思いおこすような伝統的なあたたかいデザインのなかで、肩をよせあつて寝られるようにしたのです。最初は、あえてさびしくないように、少し広めの竹のベッドで、二人がならんで寝られるようにしたのですが、福祉局の規定と指導で、一人ひとスペースに作りかえざるをえませんでした。」

「西洋的個人主義で物事を考えてい

講演会報告会の以来は、松居友へ

mc1tomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号: 080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)

る専門家というのは、そういうものですよ。」

「子どもたちは、二人のほうがいいよー!と叫んでましたけどね。」

「でも、少なくとも4人6人で寝られるし、部屋をでるとポーチだから、そこが生活の壁、個人の壁、自然との壁をとりさつた、友情と愛でつながれる広々とした生活空間になっているから・・・。」

「あの後ろの竹の家は?」

「ああ、あれは結婚して子どものいるスタッフの家。スタッフたちもぜんぶあわせると25名ほどいるけれども、ほとんどがここの卒業生たち。ソーシャルワーカーもハウススペアレントもいます。結婚して子どもをもつたら、この敷地内に家をたてて良いことになっていくんです。家代も支給してね。医療と教育も保証しています」

「生活が保証されているわけですね。それはすごい。医療と教育がたならスタッフも安心して子育てができる



し、何人でも子どもが産める。」

「ええ、北欧の社会保障制度を見習ってみたいんです。本来は政府がやることなんでしょうけれどもね。」

「うーん、驚いたなあ。ここは図書館というよりは、ちいさなコミュニティみたいな感じの場所ですね。」

料理、洗濯、庭づくり

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、毎朝こうたいで4時半に起きて朝食のしたくをはじめ。食堂にちかい台所で、マキをつかって火をたいて、ほほスタッフの分をいれると一〇〇人ぶんに近い量のごはんをたき、おかずをつくる。

交代制だといっても、朝早く目をさまして一〇〇人分の料理をつくるのは、大変な仕事だとおもうのだけれど、ぜんぜん嫌な顔をもせず、むしろ楽しそうにおしゃべりしたり笑いながら、朝ごはんのしたくをしていく。

朝食当番ではない子たちも、五時ごろには起きだして、庭の手入れや掃除をしたり、水浴びをして学校に行く用意をはじめ。すると、カンカンカンと朝食の準備がととのったことをつける鐘の音がして、子どもたちがおしゃ

べりしたり笑いながら、食堂にあつまってくる。ぼくや妻の顔をみると、笑顔で声をかけてくる。

「おはよう、パパ友。」

「ママープリル。よくねられた?」

「うん、きみたちは?」

「ぐつすりねられたよ。」

「明日は学校ないし、夜は映画見られる?」

「もちろんだよ。」

「わーい!」

「やったー!」

「何がいい。」

「トトロ!」

ミンダナオ子ども図書館には、テレビがない。しかし、翌日に学校がない日は、みんな集まって映画の上映会をすることになっている。子どもたちにとっての、最大のお楽しみのひとつ。

土曜日の休日は、女の子たちは、庭の手入れや野菜づくり。男の子たちは、草刈り機で雑草をかつたり、薪割りや畑仕事。洗濯もちゃんと自分たち



です。洗濯は、手こぎ井戸や蛇口からタライにみずをためて、せつけんをつかってごしごし洗う。

訪問者は、タライに水をいっぱい入れて、しゃがんで手でごしごしと洗っている子どもたちを見て、ちよつと哀れにおもっている。

「洗濯機は、ないんですか?」

「ありますよ、ほらあそこに、二層式ですけど。」

「ほんとうだ。あるのに、使い方しらないのかなあ?」

「使い方は、知らないわけではないんだけど、なぜか手で洗いたがるんです。」

洗濯機があっても、手でごしごし洗っている子どもたちを見て、当惑する訪問者たち。

実はほくも、最初は、洗濯機を見たことも使ったこともない子どもたちにも、文明の利器、洗濯機を使わせてあげたら、その効率の良さにおどろいて大喜びするだろうとおもっていた。しかし、そんな先進国意識からでた「上から目線」は、あつというまに吹き飛んでしまった。ようするに、子どもたちは、洗濯を楽しんでしているのだった。

ここに来て学んだのは、洗濯は物干しもふくめて、日本の家庭のように、

講演会報告会の依頼は、ちよくせつ松居友へ

mcltomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号: 080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)



孤独にひとりでするものではないということ。たらいに洗濯ものをいっぱい入れて、洗濯を一人が始めると、かならず何人もの気のあう仲間がよってきて、楽しくおしゃべりをしながら洗濯がはじまる。ときには、冗談をいって大笑いをしたり、ときには真剣に何やら話しあいながら・・・。

それを見て、すぐにぼくは「井戸端会議」という言葉をおもいだした。日本でも、昔は洗濯を手こぎ井戸のある井戸端で、村の女たち子どもたちがあつまって、冗談をいったりうわさ話をしたりしながらしたものだ。ここではそれがまだ生きている。

洗濯しながらおしゃべりする、それが楽しくって洗濯をする。

嫌なことでも友達に話して聞いてもらって、石鹸つけて思いつきゴシゴシ洗って水にながせば、汚れもすすきり、気持ちもすすきり。

洗濯機があっても使わないのは、スッチ押しだけで洗濯がしまがって、コミュニケーションがまったくなくてちっとも楽しくないから。

ミンダナオ子ども図書館の洗濯用の水は、手こぎの井戸か、敷地内の井戸から水をくみあげた蛇口をつかっているけれども、山奥の集落での洗濯はもったのしい。子どもたちは、近所の子たちをさそって、洗濯物をいれたタライを頭にかかえて、はるか下の川までおろしていき、川で洗濯。

洗濯が終わったら川にとびこんで、水をかけあって自分たちを洗濯。

もうひとつ、日本から訪れた訪問者や若者たちが、この子どもたちを見ていて驚くことは、いやな顔ひとつせず「はい！」と答えて実行すること。

たとえば、洗濯中の年上のお姉ちゃんが、洗剤がなくなってしまう、近くで遊んでいる年下の子に、

「ねえ、お店にいった洗剤かきつてきてちょうだい。」というとき、その子はむちゅうで遊んでいたにもかかわら

ず、「はい！」とつけてかけていく。嫌な顔ひとつせずに。

年下の子どもたちにとって、年上の子どもたちは、血がつながっていないくても、お姉ちゃんお兄ちゃんなのだ。

そのかわり、上の子たちは、下の子たちをきづかい、ときには母親のようにめんどろを見てあげる。

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、血がつながっていないくても、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民と宗教や種族が違っていても、まるで兄弟姉妹のようで、彼らのいうところによると、わたしたちはひとつの家族なのだそう。

そんな、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちを見て、日本から来た若者がいった言葉がわすれられない。

「この子どもたちは、本当に自立している！」

イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族がいっしょに生活

ミンダナオ子ども図書館を訪れた人が、もうひとつ驚くのが、ここではイスラム教徒、キリスト教徒、先住民族の子どもたちが、いっしょになかよく暮らしていることだ。



日本でもそういう話をするとき、「そんなこと、可能なんですか。とても信じられない！」という返事がかえってくる。なかには「そんなことは、不可能だ！」と答えられるクリスチャンの方もいらっしやる。

「でも、子どもたちはいつていますよ。イスラム教徒もキリスト教徒も先住民族も、宗教や種族がちがっていても、ここではみんな兄弟姉妹だ。ひとつの家族だ。」

ぼくがそう答えると、なかにはさらにつっこんで、問いかけてこられる方もいる。

「しかし、習慣が違うでしょう。た

たとえばイスラムの人たちは、豚を食べない。そうした違いをどうのりこえるのですか？」

「子どもたちが、自分たちで話し合いをするんですよ。どうしたらいいか。彼らの出した結論はこうです。『イスラムの子たちは、豚を食べない。だったら、ここでは豚を料理するのはやめよう。』」

キリスト教徒の子も先住民の子も賛同します。『そうだ。そうだ。』『食べるのをやめよう。鶏肉と魚でじゅうぶんだよ。』

すると、ぎゃくにイスラムの子たちがこういったんです。

『でも、キリスト教徒の人たちは、結婚式とか特別のお祝いがあると、豚の丸焼きを料理して食べるんだよね。』

『伝統だよネレッチョンバボー。』

『ミンダナオ子ども図書館では、イスラムの文化祭、クリスマスチャンの文化祭、そして先住民の文化祭を毎年するよね。そして、文化祭が終わった



ら、それぞれの特別料理を食べるよね。だったら料理したらいいよ。』

『そうだそうだ。クリスマスチャンの文化祭では、豚の丸焼き！』

『先住民の文化祭では、カエルの煮こみに、ニシキヘビの蒲焼き！』

それを聞くとイスラムの子たちは、いっしょに顔をしかめて、でも他の子たちの気持ちを察してこういったんです。

『ぼくたちイスラム教徒は、豚も食べないけど、カエルもニシキヘビも食べちゃだめなんだ。でもねえ、そういう特別な日には良いよ。かまわないよ。だって伝統だもの。ただ、食卓を別にしてくれたらそれで良いんだよ。』

『ありがとう！』
それが、彼らの結論だったのですよ。」

それを聞くと、日本からの訪問者や若者たちの子どもたちへの目が、さらに変わっていくのが見えた。

このようにミンダナオ子ども図書館では、ことなった宗教や種族、文化の子たちがいるけれども、みんなおたがいの違いを敬意をもって認めあいながら生活している。

宗派の違いを「超えて」生活しているのではなく、敬意をもって違いを認めあって生活しているのだ。世界は多

様な方がおもしろい。人間の顔だって、肌の色も背丈も目も、皆ことなっているから良いのであって、みんないっしょの顔だったらちっともおもしろくないだろう。ことなっているけど、体つきは90%同じ。10%の違いがあるだけ？違いがあるからおもしろい。

信仰も多様であって良い、希望も多様であって良い、愛があればそれで良い。どんなに強い信仰や希望をもっていても、愛がなければ無に等しい。

ミンダナオ子ども図書館のあるマノゴンル村は、ほぼ大半がクリスマスチャンの村だ。しかし、クリスマスチャンにもいろいろな宗派があって、この小さな村



にできても、カトリック教会がいかにプロテスタントと呼ばれている、アラヤンス、バプテスト、チャーチオブゴッド、メソジストなどの教会が散在し、さらにそれ以外にもエホバやフィリピン独特のイグレスシアニクリストなどもある。

ミンダナオ子ども図書館は、政治に関与せず、特定の宗派のもとでは行動しない定款をもっている。そんなわけで、奨学生やスタッフも、どこの教会にいても自由で、日曜日になるとそれぞれの気になった教会に行く。先週は、プロテスタント教会にいった子が、今週はカトリックの教会にいったり、本当に自由だ。

ただし、この村にはイスラム教徒の礼拝所であるモスクがない。町まで行けばイスラム教徒もたくさんいるし、モスクもあるのだけれど、ちよつと遠い。子どもたちにとつても、お祈りは大事なことなので、これでは不平等だと考えて、みんなで相談して決断した。「ミンダナオ子ども図書館のなかに、モスクを建てよう。」

そこで、日本の支援者の方々に相談すると、あるカトリック教会の信徒の方々が動いてくださった。その方々は、日本イスラミックセンターと連絡を取り、そこで協同で寄付を募り、モスク

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。

を建ててくださったのだ。イスラムの子どもたちは、これでお祈りができると大喜び！

その後さらに、先住民族の子たちが伝統的な祈りをするための小屋、バルバランも建設した。

そんなわけで、敷地内には、3棟の長屋と、先住民族のマノボ族がお祈りをするための小屋バルバラン、そしてイスラムの子たちがお祈りする白いモスクがたっている。

ラマダンの時期がちかづくとき、クリスチャンや先住民の子たちも、モスクの周りの草刈りをして、花壇を作って、イスラムの子たちが気持ちよくラマダンを迎えられるようにしてあげる。

ラマダンにはいると、イスラムの子たちは、昼間断食をしてモスクで祈る。時には、クリスチャンの子も興味を持って、いっしょにラマダンをしたります。

そしてラマダンが明けると、断食をしていたイスラムの子たちが食卓にもどってくる。

すると、他の子たちがいう。

「ハッピー、ラマダン！」

「ラマダン明け、おめでとう！」

すると、イスラムの子たちが答える。

「サラマッポ！」

「ありがとう！」

ミンダナオに来て感じたこと

前田郁実

わたしが、ミンダナオに来て感じたことは、ふたつある。まずひとつめは、子どもたちの心の強さである。

友達や直接子どもたちから、MCLに入るまでの話を聞かせてもらって、両親を目の前で殺されたり、病気によって亡くなったり、家庭内の暴力により身体的や精神的につらい状況であったりと、日本の中だけで暮らしているとはわからない過酷なことが、子どもたちの問題として起きていることを知ることができた。

しかし、MCLで暮らしている子どもたちは、そのような過去にとらわれず、常に笑顔で楽しんでいることがよく分かる。その大きな理由として、MCLが活動のメインとしている絵本の読み聞かせがあげられる。絵本には基本的にバッドエンドのストーリーは存在しない。そのため読み終わると楽しい気持ちになる。そうして読み聞かせを何度もおこなうことで、子どもたちは次第に心を開き、笑顔になる。こうした活動を多く行ってきたMCLの子どもたちは、過去の出来事を受け入れながらも今を楽しく過ごしている。

二つ目は他宗教を受け入れ共に行動

する心の広さである。MCLでは、キ

リスト教やイスラム教、マノボ族やピサヤ族といった他宗教他部族の人たちが生活している。同じ場所で寝て、同じ時間に起き、同じご飯を食べ、一緒に遊び、喜びを共有している。友さんが講演会で話してくれていたように、ケンカや争いが起きない。この光景を見たとき、MCLの子どもたちの心の広さを実感した。実際フィリピンでは宗教間での争いがよく起きているらしい。しかしここではそんな欠片も感じられない。まるでMCL全体が家族であるかのようなのである。さらに、そこに訪れ活動をしている私たちのことを兄弟と呼び受け入れてくれる。友さんは「活動を行う前にまずその人と友達になる」ことが大切であると教えてくださった。子ども達と親しくなり友達になった今、自分がこの子ども達に何ができるのかも一度考えていきたい。

ミンダナオで感じたこと

井谷 健太郎

ミンダナオ子ども図書館に来て一番最初に感じたことは、子どもの明るさだった。この子ども達は初対面の自分たちにもフレンドリーでとても話しやすいかった。しかし、このスタッフや友さんの話を聞くと、戦争で両親が目の前で殺されたり、家族が貧しくて生活できなかったりと壮絶な過去だっ



た。この話を聞くと、日本では考えられないようなつらい過去を乗り越えてきたんだと、この子ども達の心の強さを知った。また、友さんのお話を聞くと、ここに来るまでは元気がなかった子どもも少なくないらしい。

しかし、子ども達は自分で支え合っているように生きており、家族のように接しており、楽しそうに生活をしている。個人的には今の日本には足りていない物がここにはあると感じた。現在の日本の若者は勝ち負けにこだわり、思いやりや支え愛がないように見える。日本には生活の豊かさはあっても、心は貧しいのではないかと感じた。



とだった。しかし、子ども達はみんな笑顔いっぱいでも貧しいけど、何となく生活しているように見えた。そのことを友さんに話すと、まず友達になることから始めたらしいと言われた。そのことを言われた時点でポニーヤリとしかイメージがわいてこなかった。ある日仲良くなった女の子が家族のことを話してくれた。その子は普段は明るいのだが話しているときは暗く、ネガティブな発言もしていた。自分はただその話を聞いて、拙い英語で自分の気持ちを伝えることしかできなかった。それが自分のなかではとても悔しくて無力さを思い知らされた。しかし、そのことがきっかけで距離感が縮まり



仲良くなったような気がする。友さんが言っていた「友達」になることから初めて行く意味が自分のなかで少しわかった。話を聞くだけでも力にはなれるし、それが自分ができることなのかもしれないと思った。ここでは素晴らしい経験をたくさんさせてもらった。なので今度は自分が子ども達に何か恩返しのできたらよいなと思った。

ミンダナオ子ども図書館で

吉國 敬一郎

今回、ミンダナオ子ども図書館での生活は、一回目とは違った体験ができた。一回目の滞在では、友さん、エープリルリンさんとともに外にいるスカラーの調査に参加できる、大変貴重な体験をさせていただきました。しかし、一回目の滞在では、ミンダナオ子ども図書館に子ども達と接する機会がすこし少なかったように感じました。

しかし、二回目の滞在では、ミンダナオ子ども図書館に住む子ども達と、たくさん遊び、笑い、話すことができました。そして、マノボ族、ピサヤ族、ムスリム族が共同生活を送る姿を見て改めて、ミンダナオ子ども図書館のチームワークの強さを感じることができました。そして、ミンダナオ子ども図書館に滞在して、一番感じたのが、仲の良さです。他民族が暮らすなかで、



民族間のなかが悪いわけではなく、仲良く遊ぶ姿を見ると、同じ民族なのではないかとかんじてしまうほどでした。そして、先輩の高校生が、小さな子ども達の面倒を見たりと、心暖まる光景を目にして、子ども達に私がエネルギーをもらった感じがしました。

そして、この経験を生かし、ミンダナオ子ども図書館を多くの人に知ってもらえる活動が日本でできれば、いいなと思っています。

今回19日間にわたり受け入れてくださったミンダナオ子ども図書館の松居友さん、エープリルリンさん、その他スタッフの皆さん、ありがとうございました。

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。

2014年-2015年の対外プロジェクト活動明細

MCLは、非常に厳しく明確な会計で、支援を現地の子どもたちへ届けています

<p>A：読み語り</p> <p>読み語り 50,469.55 ペソ</p> <p>B：文化プログラム</p> <p>学生総会（年四回） 105,617.55</p> <p>文化調査 1,752.00</p> <p>創立記念日 2,222.00</p> <p>合計 109,591.50 ペソ</p> <p>C：スカラシップ支援活動</p> <p>授業料およびプロジェクト 1,624,147.28</p> <p>小遣い 2,837,043.32</p> <p>食費自炊代 25,368.85</p> <p>学用品 77,407.66</p> <p>学用靴 25,000.00</p> <p>制服代 112,751.65</p> <p>学校靴 5,000.00</p> <p>復習授業 6,500.00</p> <p>下宿代 277,617.00</p> <p>とが 120.00</p> <p>リクリエーション経費 67,208.82</p> <p>トレーニングセミナー代 10,793.34</p> <p>ガソリン運搬経費 183,293.47</p> <p>活動食費 59,608.63</p> <p>公共移動費 95,066.00</p> <p>住み込みの奨学生経費</p> <p>食材費 767,677.35</p> <p>日常生活費 63,857.80</p> <p>食料雑貨 203,688.52</p> <p>書籍その他 9,025.65</p> <p>光熱費 87,785.12</p> <p>水道代 61,180.62</p> <p>ハウスペアレント諸費 15,000.00</p> <p>子供の個人物代 40,212.41</p> <p>平和の祈り費用 216.30</p> <p>諸費用 10,825.01</p> <p>合計 6,666,394.80 ペソ</p>	<p>C：医療活動</p> <p>入院医療費 819,236.75</p> <p>食費軽食代 38,469.94</p> <p>公共移動費 56,253.50</p> <p>ガソリン運搬経費 5,580.00</p> <p>患者の個人物代 145.00</p> <p>医療器具代 2,285.25</p> <p>諸費用 2,635.00</p> <p>合計 928,250.99 ペソ</p> <p>E：保育所建設</p> <p>黒板 2,692.75</p> <p>椅子 14,400.00</p> <p>建物 380,408.89</p> <p>補修費 2,469.00</p> <p>移動用具 110.00</p> <p>輸送経費 7,896.00</p> <p>ガソリン運搬代 27,913.94</p> <p>食費軽食代 15,675.00</p> <p>合計 451,565.58 ペソ</p> <p>F：農業支援</p> <p>食費軽食代 25,846.35</p> <p>公共移動費 9,547.00</p> <p>農業諸経費 270,679.39</p> <p>ガソリン代 20,660.52</p> <p>植林経費 18,579.95</p> <p>合計 345,313.21 ペソ</p> <p>対外プロジェクト活動合計 8,551,585.63 ペソ</p> <p>一般活動事務経費合計 6,249,009.02 ペソ</p> <p>内訳：下宿小屋施設の家具等、訪問者の対応 機材費、スタッフ研修、台所建設及び補修 電気・水道代、保険年金、郵送費、給与 電話インターネット、季刊誌印刷、会議費 コンピューター、家屋補修費など</p> <p>総計 14,800,594.65 ペソ</p> <p>1円0.38ペソで計算 38,948,934円</p>
--	--

11 テレビで放映された「なぜここに日本人」を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。
「ミンダナオ子ども図書館だより」 <http://www.edi.t.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm> から、映像サイトに。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
食べられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても治せないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）**
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には年4回、1、4、7、10月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。支援者がまだ見つからないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費、医療費、生活費（MCLは、孤児施設としての許可も得て活動しています）。MCLや宿舎に住んでいる、子どもたちの食費や生活費（ほぼ250名）。奨学生以外の子どもたちの医療費。戦争の時の緊急支援費。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。不要の方は、ご一報いただければ幸いです。
- 2、植林環境支援・・・6万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代を加えました）**
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
- 3、保育所・下宿小屋建設支援・・・40万円（簡易保育所）80万円（スタンダードまたは総セメント製）**
振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年4回季刊誌と同時に毎年10月号には、現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障。経費には、食費医療費、制服学用品、小遣い、寮下宿代、生活費が入っています。

- 1、大学生スカラシップ・・・年額70000円（月額5833円）**
（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）
- 2、高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**
振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、本人からの手紙（英語）、7月に成績表、10月に写真、1月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里子支援（小学生）・・・年額40000円（月額3333円）**
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌と特別号に同封して、7月に写真、12月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内します。プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、

メール mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉さん）

Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）メール：mcltomo@yahoo.co.jp

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines